虹色のひろば

中学校の相談室から見えるもの

小山潤也（大崎町立大崎中学校かけはしサポーター）

鹿児島県にある中学校で働きはじめて８年。あっという間の８年に感じる。私は２０１７年４月に、鹿児島県の大隅半島にある大崎町という町に群馬県から移住した。（「育ちと学び」Ｎｏ．３７〔若者のひろば〕に関連記事があります。）３年間は地域おこし協力隊として、教育委員会に配属され中学校で勤務した。それ以降は、業務委託契約を町と締結し、引き続き同中学校を中心とした支援業務を続けている。

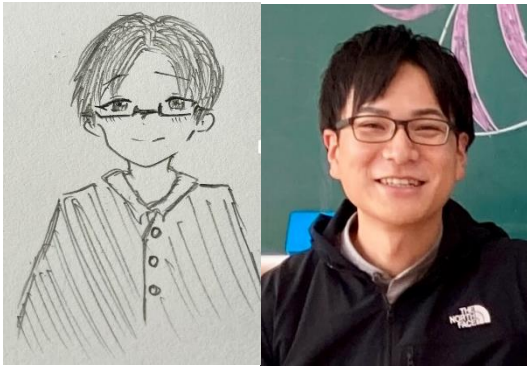
中学校の相談室という少し特別な場所から見える景色について、思うことを書いてみたい。

いくつかのふるさとを持つということ

私のふるさとは群馬県にある。それは生まれ育った場所という事実と、自分を支えてくれる思い出の場所という、精神的な感覚においてもそうである。鹿児島から群馬に帰省する時、東京から関東平野を貫く高崎線に揺られると、赤城山が目に入り、白衣観音が見えて来る。懐かしさとノスタルジックな安心感を覚える。しかし、逆に群馬から鹿児島に戻ると、また似たような感覚を覚える。鹿児島が私の第２のふるさとになったのだと思う。そう考えると、ふるさととは自分の生まれ育った場所とは限らない。自分の心落ち着く場所、よりどころとなる場所なのだと思う。そんな場所をいくつか持っておくことが、人生において大切なように思う。

中学校の中の相談室について

中学校の中に「相談室」という場所を設けている。私はその相談室に机を置き、終日そこにいる。そこには毎日１０人前後の生徒が登校し、利用している。明確な規定などは設けられていないが、再登校のきっかけや教室に行きにくさを感じている生徒の居場所と学習の場所になっている。イメージとしては、校内フリースクールのような場所だ。ともすると、皆さんが思う以上に自由度が高い場所かも知れない。生徒たち自身も「ここは治外法権だ。」と言うほどである。



小山さんの近影と生徒が描いた似顔絵

椅子を４つ並べてうたた寝をして「給食だぞ！」と起こされる生徒がいたり、６段のトランプタワーが作られる日があったり、ここには書き切れない多様性がある。ある生徒は１日の大半をタブレットとともに過ごしている。音楽を聴いたり、動画をみたりしながら、時々授業に顔を出して、テストは時間を区切って受けている。

相談室に現れたトランプタワー

それを学校が許可し認めてしているのか、と問われると、そこまで正式な過程は経ていないし、厳に結論として出ているわけではない。しかし、咎めそれを禁じているわけでもない。目をつぶってもらっているのかもしれない。だが、その生徒にとってこの場所やタブレットがあることで学校に登校でき、生徒や教諭らと交流が持て、授業に参加し、学校を通して社会と接することができるのであれば、その子どもの社会的自立に役立つ、と私は考える。また学校長のリーダーシップの下、

社会的自立や居場所という考え方が学校全体にも共有され、実践できる環境、雰囲気が醸成されている。

無論、他の生徒や学校全体の公平性においても十分に考慮して対応している。個々の特性を本人から見聞きし、保護者、医療機関とも連携して、全人的な姿を把握、理解しようとしている。何よりも、そこにあるストーリー（本人の困り感や本人なりの理由、物語）を丁寧に解きほぐし、言語化し、通訳していくのが私の役割だと思っている。実践しているソーシャルワークのようなことや、福祉的な視点が、学校の風土に取り込まれているように感じている。

授業は廊下でも・・・

ふるさととしての相談室

卒業していった生徒の中には、発達特性や複雑な事情を抱えている生徒もいる。全日制の高校へ進学した生徒もいれば、通信制や特別支援学校へ進学していった生徒もいる。数は少ないが、進路未定で卒業する生徒もいる。そんな様々な生徒たちが中学校を卒業する時には、可能な限り社会資源へ接続し、進学先との連携や継続的な支援を試みている。様々な協力があり、中学校を卒業した後も地域や進学先で、理解や支援を受けながら生活している。中には高校生になって、別人のように生き生きと高校生活を謳歌している生徒もいる。県外の大学へ進学を決めた生徒や就職を決めた生徒も複数いる。

相談室には今、中学校に在籍している生徒に限らず、過去に相談室を利用し卒業していった生徒も多く訪れる。困ったことがある時はもちろんだが、嬉しいことがあった時や、寂しさを感じた時も来てくれる。今年の夏休みに相談室を訪れた卒業生は「相談室は自分の家であり、自分の部屋だった。色々なことから守ってもらえて安心できる場所だった。ここがあったから学校という場所にも来られて、勉強も少しだったけれどできた。」と語ってくれた。その生徒が窓から外を眺めたり、廊下からの景色を眺めたりすると「懐かしい。なんかふるさとに帰ってきた感じ。」と口にした。

懐かしく感じる場所、そして「ふるさと」と呼んでもらえるような場所が学校の中にあったことを嬉しく思った。

子どもたちの声から

ある生徒はシームレスな支援のために、小学校の時から顔を合わせていた。その生徒は今中学３年生である。「中学生になったらまともに生活できると思っていた。やり直したかった。でもできなくて、結局先生のところの住人になっちゃったなぁ。」と苦笑いをしながら話してくれた。

また別の生徒は「相談室がよかった反面、ここに甘えちゃって、沼（ぬま）っちゃったなぁ。ここは本当の沼みたいだから、一度入ると教室に戻るのマジで難しいんだよ。でも、なかったら学校にも来てないから、なんか難しい場所だ。」と教えてくれた。

子どもたちは自分の置かれている状況をよく理解している。「このままじゃ高校でやっていけないよ。」と口にする大人もいるが、そんなことは誰よりも子ども自身が分かっている。是非、肯定的な言葉にリフレ-ミングして「こんな風にチャレンジしていこうよ。」と前向きに伝えてほしい。

そんな私は中学、高校と不登校を経験している。当時は毎日を生きることが苦しかった。学校に行けない無力感と劣等感でつぶされそうだった。

しかし、今となっては本当によい経験をしたと思っている。その経験がなかったら、今の私はいない。ここまで支えてくれた全ての方々に。そして、その経験を生かせるこの職場と、こうして語らせてもらえることに心から感謝したい。